

て 曲直瀬道三の『遐齡小児方』について

広 田 曄 子

『遐齡小児方』は室町時代の後期に曲直瀬道三によって著された小児科の専門書である。永祿十一年（一五六八）に著されたが、発刊は寛永七年（一六三〇）である。

曲直瀬道三（一五〇七―一五九四）は田代三喜によって伝えられた李朱医学を日本的に発展させたといわれる。先に発表した、田代三喜の著した『小児諸病門』では、それまでの中国医学模倣を抜け出した独自の展開と経験の深さがみられたが、『遐齡小児方』ではそれがどのように受けつがれているであろうか。

まず、目録には項目数が五〇ある。その各々の項目について、かなまじり文で書かれている。病理については『小児諸病門』と同じように陰陽五行説に基づいて書かれているが、記載はずっと簡潔である。引用文献は『小児諸病門』

と同様にほとんど挙げていない。しかし処方内容を独特の作字体で書くことはしていない。

処方数は全部で九七処方であり、外用より内服のほうがずっと多く、また、内服では煎薬のほうが丸散剤よりも多い。さらに、構成生薬数も一三までで一四以上のものはない。

このように処方数、構成生薬数といったものは『小児諸病門』と似ているが、『小児諸病門』でみられた振用という用い方はなく、古来からの煎用にとって代っている。

『遐齡小児方』ではこのように、比較的オーソドックスな内容となっているのが特徴である。

このことは目次の内容にもあらわれており、古来から小児門の最初に記載されてきた初生養護的な項目を最初にもってきている。変蒸についても項目を設けてはいるが、みだりに灸や薬治をするべきではない、と述べている。

さらに、臍帯を焼いてから切断するようにと書かれ、臍破傷風の子防としては画期的記載がなされている。

驚風、腹痛、吐瀉、痢病など、小児科領域でよくみられる疾病について述べている一方で、傷寒などの発熱性疾

患、呼吸器感染についての記載は少ないように思われる。

処方の運用についてはいちいち処方内容についての解説はしていないが、その運用は確かで、病理についての記載に適合している。加減方も適切で、薬物についても豊富な知識を持っていたと考えられる。処方の傾向としては地黄の入った処方も多く、大黄の入ったものもあって種々の生薬が用いられている。

民間療法は『小兒諸病門』と比べると少ない。

以上のように『遐齡小児方』では、『小兒諸病門』と同様に李朱医学を継承しており、五行に基づく記載をしているものもとても大きな特徴である。

しかし、『小兒諸病門』でもそうであるが、記載は簡潔で、構成生薬数も多くはないのが中国の李朱医学とは大いに違う点である。

また、『遐齡小児方』では初生養護的記載を先にするなど、形式的には古来からのやり方が目立つが、その内容は驚くほど近代적である。呪術的記載もほとんどない。

以上のように、内容、構成生薬の数などの面からみて、

『遐齡小児方』はそれまでのどの医書にもない近代的な面

を多く持つ小児科領域の書物といえよう。

(東京都三鷹市)